期間：平成 26 年 11 月 6 日(木)～11 月 25(火)
場所：愛知県立大学長久手キャンパス図書館 1 階フロア
主催：愛知県立大学長久手キャンパス図書館、稀書の会

図書館展示「俳諧の流れ～源流から大河へ～」について

（日本文化学部国語国文学科　久冨木原玲教授、伊藤伸江教授）

今や、俳句は世界文学となっています。日本国内はもちろんのこと、フランス語や英語など、さまざまな言語で創作され、世界で最も短い詩として親しまれているのです。この俳句の源流をたどりつつ、現代までの流れを５つのセクションを設けて大まかに、ご紹介します。

俳句のルーツは『万葉集』や『古今集』にみえる「笑いの歌」に遡ることができます。「笑いの歌」から連歌へと受け継がれ、その「俳諧の連歌」の発句(最初の句)が、俳諧・俳句として独立したとされています。今回の展示は、この流れに沿った構成にしました。

【1】「俳諧の源流」

『古今集』に「誹諧歌」という部立があることに注目して下さい。「俳諧」の語源は、これに由来します。(ただし、古今集の場合、「誹諧歌」であって言偏です。)

【2】「連歌から俳諧へ」

一般的には、あまり知られていない連歌から俳諧への資料で興味深いものです。俳諧の撰集が成立するまでには、中世に流行した連歌の撰集が広く学ばれた長い歴史がありました。

【3】「芭蕉の世界～やつしの心～」

芭蕉は、伊賀の出身で、俳諧の文学性を高め、集大成した俳人としてよく知られていますね。芭蕉七部集からは、芭蕉の俳風の深まりとみごとな開花がみてとれ、また特に尾張・三河地方に門弟が多くいたことがわかります。

【4】「尾張・三河の俳諧」

愛知県ゆかりの江戸時代の俳人たちの作品を紹介しています。『弥生日記』については、教員と大学院生を中心に、調査・研究が進められており、昨年度は図書館主催の講演も行われました。

【5】「高木市之助・初代学長～広き学びと high thinking～」

高木初代学長は日本の古典文学全般に造詣が深く、英文学(特に、ワーズワースの詩)にも通じていた「知の巨人」であったことに加えて、今年度に、ご遺族から版本等及び学生のための図書費の寄付がありましたので、これを記念して、ご紹介しました。展示の中に、アーサー・ウェイリーの『源氏物語』英語訳がありますが、これは世界初の完訳です。この英訳を通じて、『源氏物語』は世界各国の言語に重訳されました。ちょうどこの英訳が上梓された約 90 年前に、高木先生はオックスフォード大学に滞在中で、すぐにこれを読んで、日本の学術雑誌に批評を書き送っています。ウェイリーとも、直接、会って、いろいろな話をしたようです。No.26「源氏物語翻訳世界地図」は、2014 年現在、30 数カ国で翻訳されている状況を示したものです(この中には、日本語から翻訳されたものもあります)。今後ぜひ、「俳諧世界地図」も作成したいものです。

展示資料解説

【１】「俳諧の源流」

(1)『万葉集』

巻十六戯笑歌　冒頭部分

編者・成立年未詳

奈良時代に成立した現存最古の歌集。大伴家持が現在の形に近いものにまとめたとされる。歌数4500余首。仁徳天皇の皇后磐姫(いわのひめ)の作といわれる歌から、天平宝字３（759）年、大伴家持の歌まで約 400 年にわたる全国各地、各階層の人の歌が収められる。東歌・防人歌など、豊かな人間性を素朴・率直に表現した歌が多い。巻十六には、歌物語のような長い詞書の竹取翁の歌や、滑稽な無心所着の歌などが収められる。展示は文化２年(1805)の刊本。

(2)『古今和歌集』　貞応２年系統本

巻第 19（雑躰）冒頭部分

紀貫之ほか撰、平安時代

最初の勅撰和歌集。八代集の第一。延喜 5(905)年、醍醐天皇の命により紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑が撰し、同 913 年ころ成立。六歌仙・撰者らの歌約 1100 首を収める。歌風は、雄健でおおらかな万葉集に比べ、優美・繊細で理知的。巻第 19 は、短歌、旋頭歌、そして滑稽味のある誹諧歌を集めたとされる。本写本は、貞応２（1223）年の奥書を有するいわゆる貞応２年本であり、鎌倉～南北朝時代の僧侶・歌人の頓阿筆とする極札(きわめふだ)がある。

(3)『古今和歌集』　嘉禄２年系統本

奥書部分

紀貫之ほか撰、平安時代

最初の勅撰和歌集。八代集の第一。延喜 5(905)年、醍醐天皇の命により紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑が撰し、同 913 年ころ成立。六歌仙・撰者らの歌約 1100 首を収める。

古今和歌集には、藤原定家が関与した写本が極めて多く、その中では、定家直系の子孫二条家が古今伝授に用いた貞応２年本が大きな潮流をなしているが、また一方、冷泉家が用いた定家自筆嘉禄２年本(国宝)が冷泉家時雨亭文庫に現存している。本写本は、嘉禄 2(1226)年の奥書を有し、嘉禄２年本系統に属する。室町頃の書写であろう。

(4)『新古今和歌集』

藤原定家ほか撰、鎌倉時代

八代集の掉尾を飾る勅撰和歌集。歌数約 2000 首。建仁元(1201)年の後鳥羽院による撰集下命から始まり、源通具、藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅経が撰し、元久 2（1205）年成立。後鳥羽院が承久の乱(1221 年)に破れ、隠岐に移された後も編纂の手が加えられるという長期にわたるものであった。藤原定家が得意とした物語や詩文、古歌をふまえた本歌取の和歌が多く見られ、古典的世界への憧憬と浪漫的な歌風を感じさせる集である。本写本には、室町時代中期の興福寺大乗院門跡経覚筆とする極札がある。

【２】「連歌から俳諧へ」

(5)『明智光秀張行百韻』

明智光秀・紹巴ほか、天正 10（1582）年

安土桃山時代天正 10 年（1582 年）5 月 24 日（『信長公記』によれば 28 日）、明智光秀が山城国愛宕(あたご)山の威徳院で、子の明智光慶、家臣の東行澄や、紹巴、昌叱ら連歌師たちと連歌会を張行し、巻いた百韻である。愛宕(あたご)百韻ともいう。毛利氏征伐の戦勝祈願の百韻だが、実は本能寺に信長を襲うことを決意した光秀の祈願を「時は今」と詠む発句に込めたものと伝える。当館の新写本は、国文学者・故石田元季氏の手になる。

(6)『犬子集(えのこしゅう)』　巻５ 藤原定家 連歌部分

松江重頼(まつえしげより)編、寛永 10（1633）年　江戸時代

近世最初の俳諧撰集。初め松江親重、重頼の 2 人が松永貞徳の指導のもとに編纂に着手したが、編者間に意見の対立が生じ、重頼が 1 人で刊行した。題名は山崎宗鑑の『犬筑波集』を慕い付けたもの。『守武千句』や『犬筑波集』以後の秀逸な発句 1530、付句 1000 余を集めた。巻五には「上古誹諧」と題し『菟玖波集』から抄出した貴顕・名家の連歌の付合(つけあい)を入れ、連歌の流れをくむ俳諧の伝統を示している。当館の『犬子集』は、寛永 21（1644）年の再版本である。

(7)『西翁十百韻(さいおうとっぴゃくいん)』

西山宗因(にしやまそういん)、寛文 13（1673）年　江戸時代

俳諧連句集。宗因千句とも言う。以仙編『落花集』5 冊の付録の 1 冊として出されていた『宗因十百韻』を独立させて刊行したもの。巻頭の「立年のかしらもかたい翁かな」以下、宗因の独吟百韻 10 巻を収める。その作年次は、各巻ばらばらで、万治・寛文期（1658～73）の十数年間に及ぶと推定され、談林風の生成過程を知るのにかっこうの手掛りとなる。書名に「宗因」の名を冠したのは、その人気に便乗した書肆の営業策である。

(8)『紅梅千句』

松永貞徳(まつながていとく)ほか、明暦元（1655）年　江戸時代

俳諧千句。北村季吟(きたむらきぎん)の跋文によれば、貞徳の直接指導を懇望してきた有馬友仙が主催興行したもの。連集(れんじゅう)は、貞徳・友仙・正章（貞室）・季吟・安静・可頼・政信の 7 人。貞徳晩年の俳諧を実作面から知る上で最適の資料といわれている。跋文の日付や追加発句の季節を勘案して、貞徳が没する 10 か月前の興行にあたり、貞徳晩年の俳諧を実作面から知る上で最適の資料とされている。題名は第一百韻発句「紅梅やかの銀公の唐衣」による。

【３】「芭蕉の世界～やつしの心～」

(9)『虚栗(みなしぐり)』

其角(きかく)編、天和 3（1683）年　江戸時代

俳諧撰集。芭蕉門人宝井基角の編になり、芭蕉が跋文を寄せるが、貞門、談林俳人もまじる。作者は芭蕉、其角、嵐雪ら江戸蕉門を主とする人々や、京の信徳、千春、秋風、大坂の宗因ら 114 名。俳風は漢詩文調句が大半を占め、語調は難渋で完結せぬ表現のものが多い。芭蕉は「李白・杜甫・寒山・白楽天・西行」の心を学ばんとしたと考えていた。こうした吟調は「虚栗調」または「天和(てんな)調」といわれ、談林俳諧を超越して蕉風に至る過渡期の俳風を顕著に示している。

(10)『冬の日』

荷兮(かけい)編、貞享元（1684）年　江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第１。「野ざらし紀行」の旅の帰途、名古屋に立ち寄った芭蕉が、野水(やすい)、荷兮、重五(じゅうご)、杜国(とこく)、正平(しょうへい)、羽笠(うりゅう)らと興行した歌仙 5 巻、および追加の表 6 句よりなる。書名は、各連句の発句がいずれも冬の季であるところ

より由来。漢詩文調から脱して新しい俳諧の世界を開拓したもので、そこに蕉風の第一歩が確立されたといわれている。

(11)『春の日』

荷兮(かけい)編、貞享 3 年（1686）年　江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第 2。尾張俳人荷兮、野水(やすい)、越人(えつじん)、旦藁(たんこう)らによって興行された句を収録する。所収の連句はいずれも春季の興行だが、芭蕉が一座したものがなく、発句の部に「古池や蛙飛こむ水のをと」など 3 句が入集するにすぎない。全般に穏やかな吟調で詩的緊迫感は少ないものの、細かい観察による新しい詩美の発見や雅語のとらえ直しなど、『冬の日』の一面を踏襲・発展させている。

(12)『曠野集(あらのしゅう)』

荷兮(かけい)編、元禄 2 年（1689）年　江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第３。芭蕉の名古屋の門人荷兮の編纂で、発句 735 句を収め、下巻を員外として連句 10 巻を収めている。芭蕉のよせた序からは、前２集の『冬の日』『春の日』の不備を補い、さらに蕉風の新境地へのよき指針たるべく期待していることがうかがわれる。それゆえ、巻頭に貞門俳家安原貞室の句を据え、宗祇、宗鑑、守武ら、俳諧史上の古人や貞門・談林俳人の句を採用しており、古風の句の元禄正風体への読み直しを試みた。この反動性は、流行の精神を疎外する復古趣味を育んだとされる。

(13)『猿蓑(さるみの)』

去来・凡兆 編、元禄４年(1691)年　江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第５。芭蕉の監修によって編集が進められた。乾(けん)、坤(こん）2 冊。乾には巻 1 から巻 4 までを配し、坤には巻 5、巻 6 を配する。乾巻には冬、夏、秋、春の順に諸家の発句を収め、坤巻には巻 5 に芭蕉一座の歌仙 4 巻、巻 6 に芭蕉の俳文「幻住庵記(げんじゅうあんのき)」と震軒の後文、それに「几右(きゆう)日記」と丈草の跋文を収める。書名は、芭蕉の巻頭吟「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」の句に由来する。初期蕉風の漢詩文調による大きな身ぶりの風狂精神が影をひそめ、かわりに「さび・しをり・細み」など蕉風俳諧固有の清雅幽寂の世界が創出され、蕉風俳書のなかでもとくに高い評価を受けている。

(14)『続さるみの』

沾圃(せんぽ)・芭蕉撰、元禄 11(1698)年　江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第 7。はじめ沾圃一派によって企画され、元禄 7（1694）年夏秋ごろ、伊賀国において支考の助力を得ながら芭蕉自身が選定したもの。刊行はその 4 年後で、その際支考による多少の加修があったものと見られる。上巻は連具篇、下巻は発句篇。総句数は 519、作者総数は 209 人に及ぶ。書名は、蕉風円熟期を代表する『猿蓑』を継ぐ集の意。芭蕉最晩年の「かるみ」の風を基調とし、『炭俵』の「俗談平話」調を受け継ぐものといえる。

(15)『炭俵集(すみだわらしゅう)』

野波(やば)・孤屋(こおく)・利牛(りぎゅう)編、元禄 7 年（1694）年　江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第６。上巻は歌仙三巻百韻一巻と、春夏の諸家の発句を収め、下巻には秋冬の諸家の発句、ついで未完の歌仙一巻と歌仙三巻を収録する。発句は、編者らのほか芭蕉、其角、嵐雪ら江戸の蕉門俳人を主として、ほかに智月、去来、許六、支考らの作も収録されている。芭蕉の巻頭吟「梅が香にのつと日のでる山路かな」に代表されるような俗語の自由な使用が顕著な

特色で、庶民の生活を軽妙な観察で描いている。『猿蓑』以後、芭蕉が新しい俳風として求めていた「かるみ」を具現した集として評価されている。

(16)『ひさご』

珍硯(ちんせき)編、元禄３(1690)年　江戸時代

俳諧撰集『俳諧七部集』の第４。「奥の細道」の行脚を終え、近江国湖南に滞在した芭蕉の指導の下に成った集。書名は芭蕉の命名とみられ、『荘子』「逍遥遊篇」の恵子の大瓢の故事にちなむとともに、当時芭蕉が志向していた「かるみ」への思いを託したもの。巻頭歌仙の「木のもとに汁もなますも桜かな」の発句は、芭蕉の代表句の一つ。芭蕉は、これを立句に伊賀国で二度連句を興行したが意に満たず、近江でようやく成就した。『三冊子』には「軽みをしたり」との芭蕉の言が紹介されている。本集は『猿蓑』の先駆として「かるみ」の新風を初めて世に問うたものといえる。

【４】「尾張・三河の俳諧」

(17)『熱田宮雀』

樋口兼頼 編、延宝５(1677)年　江戸時代

絵入俳諧発句集。熱田神宮関係俳書で、上巻には年始より煤納までの神事の発句を挿絵つきで示し、下巻には名所、名物を題とした発句を収め、巻末に西鶴、兼頼の両吟歌仙がみられる。貞門・談林など尾張の作者は 107 名を数え、尾張俳壇の盛んなありさまを示す。鳴海の素封家で、後に芭蕉の懇意の弟子となった下里知足(吉親)の句も見える。当館の『熱田宮雀』は、上巻が天和元(1681)年兼頼序刊本を市橋鐸氏が昭和 22 年に写した新写本。又、下巻も延宝５(1677)年刊本の写しである。

(18)『鶉衣(うずらごろも)』

横井也有、宝暦 13(1763)年　楓京本

『後鶉衣(のちうずらごろも)』

横井也有、明和 3-4(1766-1767)年　方間舎庫本

『鶉衣』は、前、後、続、拾遺の４編 12 冊（各編３冊）から成る、也有生涯の俳文をほぼ網羅している俳文集。也有没後、大田南畝(なんぽ)（蜀山人(しょくさんじん)）がその文章のおもしろさに感動し、也有の俳友堀田六林(ろくりん)から稿本『鶉衣』を得て出版、それを機縁に以後続刊された。日用の俗を題材にしながら、風雅の意識により虚構の世界を再構成するという手法によってつづられるその文章は、機知と技巧を基調とする軽妙自在な味をもち、古来、もっとも洗練、完成された俳文として賞されている。もっとも、その風雅は芭蕉の風雅とは趣を異にし、洒脱であか抜けした滑稽味という点に主眼がある。『徒然草』を意識し引用した箇所も多い。

(19)『麻刈集(あさかりしゅう)』

井上士朗編、寛政５（1793）年　江戸時代

俳諧撰集。芭蕉百回忌追善集。芭蕉の「いざ出(いで)む雪見にころぶところまで」の句を発句とする脇起し歌仙をはじめ、芭蕉の尾張国での遺吟 13 章の脇起し連句と、その立句(たてく)にちなむ題名による発句を添えたもの。士郎は今の名古屋市東区に住んだ町医者。芭蕉やその高弟に関する故事などを記した『枇杷園(びわえん)随筆』、『枇杷園句集』等があり、多くの弟子を集めた。『弥生日記』の作者である鶴田卓池、中島秋挙もその門人である。

(20)『弥生日記(やよいにっき)』

鶴田卓池・中島秋挙編、文政７(1824)年　江戸時代

卓池(たくち）57 歳、秋挙(しゅうきょ）52 歳の春、三河の名所を連れ立ってめぐった後、岡崎の

花園山麓に寓居し、弥生の一月あまりを花をめでながら俳諧ざんまいにすごした折の日記である。風雅な俳諧生活の記念に同年五月、名古屋の書肆本屋久兵衛から刊行した。花園山では、蕉風を慕って、芭蕉・其角(きかく)らの初懐帋「鶴の歩み」にならい、まず両吟 50 韻を張行した。その後は、多くの門人の来訪を受け吟遊。亡き師井上士朗をしのび、芭蕉七部集の一である『炭俵』を読み、さらに滞在の終わり頃には、それを範として歌仙をまいている。

(21)『尾張当世俳諧満寿鏡(ますかがみ)』

看龍舎荷豆(かんりゅうしゃにまめ) 編、文政 2(1819)年　江戸時代

俳人叢伝。尾張俳人の当時人名録であり、107 人の自筆詠句を板に起こして肖像を描き出し、あわせて姓氏、号、住所も注記したもので、資料的価値が高い。上欄には、発句や歌仙を並べている。荷豆は侘殿秋麿の弟子であるが、秋麿またその妻いはほも載せられている。

【５】「高木市之助・初代学長～広き学びと high thinking～」

(22)『校訂古事記』

3 冊、本居豊穎・井上頼圀・上田萬年共校、明治 44 年（1911）刊

真福寺(しんぷくじ)本を含め二十種の異本を校合した明治時代の校本。

この高木市之助蔵本の上巻には、書き入れが多くみられ『古事記伝』などの語釈が記されている。また本文の全ての漢字やその訓に黒や朱の符号がみられる（黒の符号は漢字、朱の符号は訓にほどこされ、助詞は符号の形をかえて記している)。高木氏は『古事記大成　索引篇』(平凡社、1958 年)という『古事記』の漢字・語彙索引を編集しており、この符号は索引を作成する際、用例に欠落がないか確認したあとと考えられる。なお『古事記大成索引篇』の本文は『校訂古事記』を底本とし、作成に着手したのは昭和 4（1929）年とされる。

(23)『湖畔～ワーズワスの詩跡を訪ねて～』

高木市之助著　昭和 25 年(1950)　東京書籍　（改版　昭和 32 年(1957 年)　平凡社）

高木市之助は、一九二四年から二年間、イギリスのオックスフォード大学に滞在したが、その夏に湖水地方に旅した際の旅行記が『湖畔』である。高木は尊敬するワーズワースの著した「ワーズワス湖水案内」を携え、ワーズワースの家(Dove Cottage)など名所をめぐった。第一章から第六章まで、旅の随想をワーズワースの詩と訳文と共に記し、最後に湖水地方解説を添えている。

(24)『高木市之助全集』

全 10 冊　昭和 51～52 年（1976～1977）刊、講談社

高木市之助氏の著作集。上代歌謡、古事記、万葉集、平家物語を中心とし、「文学の鬼」と称された高木氏の文学論・文芸論をみることができる。高木氏の文学理論は、英文学をはじめとする外国文学の分析によって成り立っており、著作の多くに英文学作品の名がみえる。

高木氏は随筆家としての一面もあり、『詩酒おぼえがき』(全集 10 巻所収)、『国文学五十年』(全集 9 巻所収）などの随想・交遊記がある。著作・随筆をみることで高木氏の記憶を追体験することができる。なかでも『国文学五十年』は、高木氏の自伝的内容ながら、自伝がそのまま明治大正の国文学史となっている。なお『湖畔』の成立するきっかけとなった、イギリス留学や英文学への憧憬などもみることができる。

(25) アーサー・ウェイリー英訳「源氏物語」

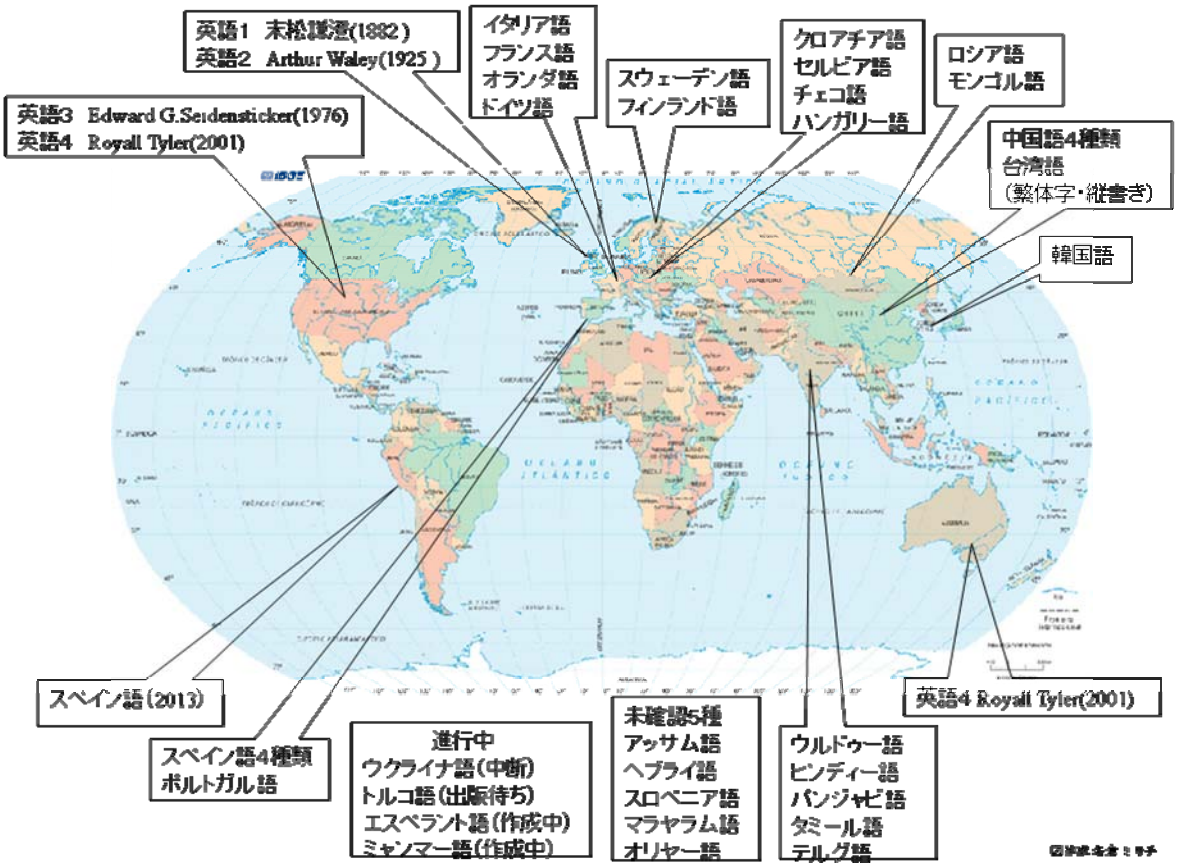
『源氏物語』を英語で初めて完訳した翻訳者。大英博物館に勤務しながら、独学で日本語を学び、8 年の歳月(１９２５－３３)をかけて完成させた。この英訳の影響には絶大なものがあり、ヨーロッ

パその他の地域で次々に重訳された。第１巻が出た時、オックスフォード大学にいた高木市之助は、すぐにこれを読んで「源氏物語の英訳」を記し、学術雑誌『国語と国文学』(大正１４・1925/10)に寄稿した。高木は、この英訳を「原作にぶつかって」「一つの英文学となって創作されている」とし、作家・正宗白鳥は、「死せるが如き原作を活返へらせ」たと述べた(『改造』1933/9 文芸時評欄)ように、すぐれた創作的翻訳であった。

(26) 「源氏物語翻訳地図」

発案＝久冨木原玲・作成＝名倉ミサ子

2014 年現在、『源氏物語』は 30 以上の言語によって翻訳されている。このように、世界各国で翻訳されるようになったのは、1925 年のロンドンでアーサー・ウェイリーが英語による翻訳を開始したことに端を発している。これによって瞬く間に、ヨーロッパ各地で重訳がなされた。この地図は、その翻訳状況を世界地図上に示したものである。最新の翻訳は、2013 年にペルーで上梓されたが(上巻のみ)、これは日本古典語からの翻訳という点で注目される。チェコ語訳も同様である(2008 年)。中国・台湾などの漢字文化圏でも原文からの翻訳がなされている。(この翻訳世界地図は、伊藤鉄也「『源氏物語』の翻訳状況」『総研大ジャーナル』NO15/2009 を参考に、新資料を盛り込んで作成した。)



(27) 『梁塵愚案抄(りょうじんぐあんしょう)　上・下』
一条兼良著　　元禄２年（1689）版　（成立は 1455 年以前）
古譜として伝承された神楽歌(かぐらうた)・催馬楽(さいばら)の注釈書。古代歌謡研究の嚆矢である本書は、賀茂真淵(かものまぶち)など近世の国学者の間に敬重され、文学的解明の草分けとしての史的意義が大きい。高木市之助氏の業績に日本古典全書『上代歌謡集』や古代歌謡の論があり、神楽歌・催馬楽において本書を用いたと考えられる。この高木蔵本の表紙裏には「齋藤勇」の名がある。高木氏は英文学に造詣が深く、また英文学者と交流もあったことから、高木氏と同時代に活躍した英文学者「齋藤勇（さいとうたけし)」の可能性がある。

ワーズワースへの誘い

日本文化学部国語国文学科　伊藤伸江教授

外国語学部の皆さんは、イギリスの桂冠詩人(Poet Laureate)ウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth,1770-1850)の詩について聞いたことがあるでしょうか。このイギリスロマン派を代表する詩人は、英文学においてはシェイクスピア同様に大変に愛され、それゆえに、その詩は広く学ばれました。例えば、“The Daffodils(水仙)”と呼びならわされた作品は、彼が住んだイギリス湖水地方の自然をうたった佳品の一つですが、映画「その名にちなんで」(2006・米)の中で、インド系の女主人公は、この作品の暗誦ができるかどうか、教養をためされています。ワーズワースの詩は、いわば、イギリス人としての心情をかたちづくる基礎教養として存在しているわけです。また、1970～80 年代年代の脱構築派の文学理論においても、ワーズワースの詩は分析されてあらたな読みを提示されました。基礎教養から高度な文芸批評まで、ワーズワースは、英文学の中で常にあらたに引用され、鑑賞しなおされ、よみがえり続けているのです。

高木氏『湖畔』から “The Daffodils”とその訳を引いてみます。

I wandered lonely as a cloud	私は、谷を越え丘を越えて
That floats on high o’er vales and hills,	高く浮遊する一片の雲のようにさまようた。
When all at once I saw a crowd,	そのときふと私は見た、一群れの、
A host, of golden daffodils;	黄金の水仙の集落を、
Beside the lake, beneath the trees,	湖水のほとり、樹々の陰に、
Fluttering and dancing in the breeze.	風にそよいでふらふら踊っている。

この詩の中で、詩人は一片の雲のように湖水地方をさまよっています。日本においても、平安期の歌人大江千里(おおえのちさと)に「我が身をば浮かべる雲になせればぞゆくかたもなくはかなかりける」(句題和歌)という歌がありました。そして、この歌は「句題和歌」と呼ばれることが示しているように、漢詩句を題とした歌であり、ここでは白氏文集の詩句を題として読んでいます。東洋的な、我が身を流れゆく雲にたとえ、自然と一体化していく思いと共通するものをワーズワースの詩は持っているのです。

折しも、イギリス湖水地方では、バース・スパ大学とワーズワース・トラスト、サンダーランド大学ウォーク・リサーチ・センターの共催で、本年５月２４日からこの１１月２日まで、「ワーズワースと芭蕉『彷徨の詩人たち』(Wordsworth & Basho: Walking Poets)」と題した展覧会が行なわれました。この展覧会は、自然をモチーフに豊かな詩情を表現し、方々を歴遊したことを、この二人の共通点としてあげ、ワーズワースの創作ノート、彼の妹ドロシー(高木氏『湖畔』ではダラシィと呼んでいる)の手稿、芭蕉自筆の『更科紀行』草稿(伊賀市蔵)などを展示しました。写真は、出品された京都国立博物館蔵の与謝蕪村筆『奥の細道画巻』(旅立ちの場面)です。

日本人が心中に育ててきた、折々の季節によりそう感性は、ワーズワースに通じるものがあるのでしょう、高木氏『湖畔』でも、ワーズワースの湖水地方の自然へのつきない愛情と、それによって生み出された愛らしい詩について述べた部分があります。紹介しておきましょう。

“To the Small Celandine”	小さい「くさのおう」に
Pansies, lilies, kingcups, daisies,	三色菫、百合、きんぽうげ、ひな菊
Let them live upon their praises;	かれらは讃められて生きるがよい。
Long as there’s a sun that sets,	太陽が没する限り
Primroses will have their glory;	桜草はその栄華を誇るがよい
Long as there are violets,	菫は花咲く限り
They will have a place in story;	物語の中に一役演ずるもよかろう。
There’s a flower that shall be mine,	だが私の花は別にある。
’Tis the little Celandine.	それが、あのささやかなくさのおうなのだ。

（中略）

このささやかな、路傍の雑草を初めて詩材としたのは、ワーズワスだといわれている。まことにそこには、従来の詩人に気がつかなかった、彼自身の貴い発見がある。一八〇二年四月三十日の妹ダラシィの日記には、この詩を詩人が朝食後草庵の庭に静坐して制作し、ときどき妹に読んできかせながら、また熱心に書き続けたと記してあるという。してみれば、この天文学者にも負けぬ彼の「眼」もまた、草庵の所与であったというべきであろう。ダラシィの日記にその朝を叙して、湖水は静かに、空は曇っていたと書いてあるが、今日もまたグラスミヤの湖水は静かにそうして空はうすく曇っていた。―そうしてわれわれの今日の見物の日程もまた静かに終わっていた。旅人たちは馭者の最後の好意によって、思い思いの旅館に配分されていった。馬車が旅館の前に駐まるたびに、車上の客は二人減り三人減りしていく。そこはかとなき旅のあわれは、どこかに芭蕉の「くたびれて宿借る頃や藤の花」に相通ずるものがあるといってはとっぴに過ぎるであろうか。

ワーズワースの詩は、かつては日本でも高校の教科書に載っていましたが、現在は姿を消してしまっています。日本の詩歌と心情的にも近いこの詩人の詩を、一度ひもといて見ませんか。

（英文学におけるワーズワースの享受については、鵜殿悦子先生、梶原克教先生のご教示を得ました。）

高木市之助の学問形成と英文学

鈴木　喬　客員共同研究員

高木市之助（1888-1974）の学問の特徴は、英文学の理論を取り入れ、日本文学を「抒情性」でとらえようとしているところにある。ややもすると、訓詁注釈の狭い学問になりがちな古典研究において、広い視野をもって作品と向き合い、立体的に作品や時代をとらえようとしていたのである。そのような高木の学問を形成したものは、高木が中学時代に愛読した文芸誌『明星』とワーズワースなどの英詩である。『湖畔』の副題に「ワーズワスの詩蹟を訪ねて」、またその「はしがき」に「文芸に於ける自然と詩人との関係についても、或は東西文芸のありかたについても、これが私の文芸論だと言つてもいゝものがこの本」とあるように、とくにワーズワースが高木の文学・文芸論に大きな影響を与えた。

『湖畔』は、高木が1924年から２年間、在外研究員としてヨーロッパ、オックスフォード大学に滞在したときの成果である。高木にワーズワースの詩蹟へと背中を押したのが英文学者「佐藤清」(1885-1960)である。佐藤は高木の友人であり、同じ時期に渡欧していた。佐藤は『湖畔』において「最も尊敬する

英文学者」として登場する。「一生その文学を通して私を教へ導いてくれるやうな詩人」は誰かという高木の質問に対し、佐藤は「ワーズワース」と答えている。つまり、佐藤のきっかけがなければ、その後の高木の学問は成り立たなかったのである。なお高木が渡欧していた同じ時期の英文学者は、佐藤清のほかに「豊田実」(1885-1972)「土居光知(こうち)」(1886-1979)「齋藤勇(たけし)」(1887-1982) などがいる。彼らはともに東京帝国大学英文科を卒業しており、その後の日本における英文学研究を支えてきた大家でもある。また高木と東京帝国大学英文科との関わりは、高木が東京帝国大学の学生時代にも認められ、高木の卒業論文『叙事詩として観たる平家物語』を作成するにあたり、W.P.Ker の『Epic and Romance』を参考にしている。この本は英文研究室から借りており、当時英文学研究室の助手であった「千葉勉」(1883-1959) の名義で借りている。高木は千葉を「恩人」と称している。

高木の学問はつねに英文学が念頭にあり、英文学研究とともに形成されていたと考えられる。なお高木と同時代に生きた先の英文学者たちは、高木と同様、ともに青年期に『明星』に掲載された新体詩に心をおどらせ、ワーズワースに感化されている（それぞれワーズワースの論があり、日本文学にも言及があり、新体詩をも作成している)。時代の潮流と学問の環境（東京帝国大学、留学）が高木の学問を決定づけたのである。高木の学問形成を鑑みると、日本文化学部と外国語学部が併設されている大学の意義をあらためて考えさせられる。

最後に二篇の詩をあげる。これは高木が愛知県立大学の学長を退任した際によんだものである。愛知県立大学の校歌（「大学は生命の泉」「叡智のすみか」）の作詞者が高木であることは有名であるが、この二篇の詩はあまり知られていない。青年期に新体詩を愛読し、研究者としての生涯、「抒情性」を求めた高木の、我々愛知県立大学で学問をする者に対するメッセージである（愛知県立大は当初、女子大であったため、学生を「乙女」と詠じている)。

女子大学長室即事

緑の風　　ばらの薫り
私は今　　この部屋を去ろうとしている
自由に　　そしてさみしく
かわいい乙女よ　　好きな先生よ
私には何の置土産もない
乙女よ育て　　すくすくのびのび
先生よ　　正しく生き給え
ただそれだけ　　ではさようなら

草庵に夜間の学生を憶う

私は今あなたと縁を断って　この草庵に帰って来た
（略）
そして私は愕然とした
そうだ私はあなたを忘れて来た
でもそれを取りに帰る途は私にはもうない
そこで心から私はあなたに祈る
学問の一筋をあなたが突き進んで
どこか四辻のようなところで
私に逢う日の来ることを
そこで、そこでこそ私は私の忘れ物をとり戻そう